

主体の解釈学

1982年3月3日の講義（第一時限） pp.377-402

K 原

キリスト教の修練と哲学の修練の分離（pp.377-9）

- アスケシス（真理を主体に結びつけること）は、禁欲という言葉で理解しているものとはかけ離れている。
- 我々の禁欲概念はキリスト教的な考え方によって形作られており、そのような考え方を「刷り込まれてしまっている」（p.378）
- ヘレニズム・ローマ期の自己の実践の修練は、キリスト教的な修練とは区別される。

〈ヘレニズム・ローマ期の自己の実践の修練〉

1. 哲学者の修練の最終目標は、自己を放棄することではない。自分自身を自分の生存の目標として明示的・強力・連続的に立てることである。
2. 哲学者の修練は自己の犠牲や放棄を秩序立てることではない。持っていないものを身につけ、自分自身のための備え、防御を持つことである（＝パラスケウエー）。
3. 哲学者の修練の原則は、個人を法に従属させることではない。真理に結合させることである。
→自己の実践の修練とは真実の言説の主体化である。自分自身との関係性についてだった。

自分自身との適切で完璧で完成した関係を打ち立てるためには、一方では真実の言説が必要であり、同時に他方では修練とは主体がみずから真実の言説となるようにしてくれるものである。

〈キリスト教の修練〉

1. 自己放棄の機能を持っている。
2. 自己放棄へ向かう過程で、ある特別に重要な契機（＝告解、告白）に道を譲る。
3. 主体は真実の言説において自己自身を客観化するが、それは真実の言説における自己客観化ではない。

真実の言説の主体化の手続きは、セネカの文章に絶えず表明されている。

「重要なことは知っていることを自分のものにすること、聴いた言説を自分のものにすることなのだ」「真だと認められる言説や哲学的伝統によって真であるものとして伝承されている言説を自分のものにすることなのだ」（p.379）→キリスト教の修練とは、やはり異なる。

主体化の諸実践。聴取の訓練の重要性（pp.380-）

真実の言説の主体化としての修練に必要な恒常的な支柱

＝聞くこと、読み書きや語りに関するあらゆる技法や実践

→キリスト教的な霊性における〈御言葉〉の聴取や〈聖書〉との関係に類似しているが、根本的に異なる
今日の講義で話したいこと（※ 第一時限では、このうち1「聴くこと」のみ話している）

1. 聴くこと、真の主体化としての修練的实践であるような聴取
2. 読み書き
3. 語ること（パロール）

真実の言説の主体化の第一段階：「聴くこと」とは？

口承的文化において、聴くことは真について語られたことを集めさせてくれるものである。

→聴かれ集められた真理が、主体化してエートスの原型を構成する第一の契機である。これによって、アレーテイアからエートスへの移行（真実の言説から行動の基本原則となるものへの移行）が始まる。

● プルタルコス『聴くことについて』

聴くということはすべての感覚の中でもっとも「受動的」である（＝パテーティコス）

→魂は聴覚においてほかのどの感覚よりも外界に対して受動的であり、外界から不意打ちする出来事にさらされているということ。聴くことを拒むことはできない。また、他の感覚によって与えられたものよりも、聴くことの受動性によって動揺させられ、また他の感覚よりも強く魂を魅惑する。

オデュッセウスの例：あらゆる感覚に打ち勝ち、快楽を拒んできたが、セイレンたちの歌と音楽には魅惑され、その虜になってしまう。

一方で、聴覚はもっともよくロゴス（真）を受容できる感覚でもある（＝ロギコス）

→他の感覚は本質的に快楽や誤謬に導く。悪徳を学ぶのは聴覚以外の他の感覚や他の器官である。

聴覚は徳を学ぶことのできる唯一の感覚である。徳は視線によっては学ぶことができない。

徳はロゴスから、実際に現前し表現される言語、音において言語的に文節され、理性によって理性的に文節された言語から切り離すことはできないからである。

● セネカの書簡第一〇八 聴覚は受動的であり、このことは不都合でも好都合でもある

セネカは聴覚が受動的であると同時にロギコスであるからこそ両義的であると示す。耳にロゴスが入り込むと、主体が望もうと望まないと、ロゴスは魂になんらかの働きかけをする。

→ひとは無料診療所に行くようにして哲学の講義に行き、帰るときにはつねに癒されつつあるか、より賢くなることができるようになっている。これが哲学の持つ効力である。

*魂の種子の植え付けの教説

徳の種子は、理性の本性に基づいて主体に植え付けられるが、主体はこれに責任を持たない。主体はうっかりしていてもロゴスにより覚醒させられうる。→聴覚が受動的性格だからこそその利点

セネカ「講義で哲学を刷り込まれているはずなのに、それをさっぱり活用できない者もいるよね？」

→それは彼らは弟子、生徒として哲学の学校にいたわけではなく、講義の客席を借りているだけで、借家人としていただけだったからだ。教説によれば彼らは借家人であっても自己を形成できると約束されているが、彼らは飾りや美しい声にだけ、語や文体の探究にだけ注意を払ったのだ。なぜロゴスは受動的な注意において、積極的な効果を限りなく生み出すことができないのだろうか？それは注意の方向がよくない対象や標的に向けられているからだ。

→適切な聴き方をするための術ないしは技法が必要だということになる。

● エピクテトス『語録』第二卷二三章

ロギコスな感覚としての聴覚について：能動的活動にも必然的に受動的な何かがあり、聴覚は危険である
「ひとは言葉や教訓によって完成の域に達する」

→教訓や口伝（パラドシス）を受け取ることが必要。しかし、それらのロゴスやパラドシスは生の状態では現れることができない。真理が聞き手の魂まで至るためには、それが発話されなければならない。そのためには、言葉そのものとその言説的な組織に結びつたいくつかの要素が必要である。

特に必要な2つのもの：レクシス…表現法 と、用語の選択…文体論、意味論的選択肢からの選択

→これらにより心理が直接伝達されるのを防いでいる。真実を語らしめる要素だけに注目してしまう危険がある。語り手にとっても聞き手にとってもこれは危険であるが、いずれにせよ聴取や聴覚により両義的な世界、システムに入る。聴くことはつねに誤謬にさらされ、つねに意味の取り違いや注意不足の危険にさらされている。

テクネー以前の聴取 (pp.384-6)

「しかるべき方法で有益に語り、無駄に語ったり、有害な仕方語ったりしないようにするためには、一種のテクネーすなわち術が必要なのだ」(p.385)「然るべき方法で語るときにテクネーが必要なと同じように、しかるべき方法で聴くためにはエンペイリア(獲得された技能)とトリペー(熱心な実践)が必要である。

語るためにはテクネー(=術)が必要

聴くためには経験や能力や熱心な実践や注意や集中などが必要

* 哲学の専門的語彙は、テクネーとトリペーやエンペイリアの間に対立を認めている(プラトンによれば、語るためのテクネーはあるが、聴くためのテクネーはない)。

聴取という修練の規則。沈黙。よき聞き手にふさわしい的確な身振りと一般的態度。注意(言説の指示対象への執着と直接的な記憶化による言説の主体化)(pp.386-402)

問題: 聴取という反省的で熱心な実践において、どう危険なパターティコスな側面を隔離するか?

方法: 沈黙(例: ポルフェリオス『ピュタゴラス伝』、ストア派において重視されている、プルタルコス『饒舌について』) ←→ 饒舌は悪徳

- 真実の言説の実践や訓練に入門するとき、新参者でしかない者は語る権利を持たない。その者は聴かなくてはならない。全面的に聴かなくてはならず、反論したり意見したりしてはならず、教えたりは決してしてはならない。
- 1940年の戦争以前の幼児教育は、主に沈黙を学ぶことから始まっていた。古代ギリシア・ローマ時代から近代ヨーロッパに至るまで、子どもが自由に話すことができるという考え方は教育制度から排除されていた(=沈黙の教育)。

→ プルタルコスにとって沈黙という神々の教育はたんに人間の教育の基本原則であるばかりではない。一生涯言葉の厳密な節制によってみずからを支配しなければならない。聴いたことをすぐに言説に変換してしまってはならず、記憶し、保持しなければならない。「饒舌な人はからっぽの瓶なのです。そしてそれは治療不可能です」(p.388) 饒舌はロゴスによってしか治せないのだが、饒舌な人はロゴスを保持しないで自分の言説に流し込んでしまうため。

→ しかし、沈黙だけでは不十分で、能動的な態度が必要。聴取は聞き手に対する的確な物理的態度を要求する。真実の言説のよき聴取は、的確な肉体的態度を求める。

- 魂が自分に向けられた言葉を聴くために純粋で障害物のないものになるためには、身体そのものも完全に平静でなければならない。ただし、身体は、魂が実際にロゴスを十分に理解して受けとっていることを示さなければならない。

→ 聞き手は話し手と交流し、同時に話し手の言説をしっかりと注意して把握していることを自ら確証する

● アレクサンドレイアのフィロンの『観想的生活について』におけるテラペウタイ派の記述

- テラペウタイ派は閉鎖的な共同体として生活しており、集合的実践を行っていた
- 宴会に参加している聞き手と、集団にまだどうかしていない若い聞き手たちが立って周りを囲んでいる
- 全員、演説者のほうに同じ態度をとって顔を向けなければならない
- 注視の義務は、身体の不動性がそれを保証し、表現している
- 古代の身体文化において、身体の不動性、造形、できるかぎり不動の彫刻的造形はきわめて重要であった。

→ 不作法な身振りや身体の絶え間ない動きはストウルティティア(魂や精神や注意の絶え間ない動揺)の肉体的な表れ

● セネカ書簡第五二

あらゆる行動は、振る舞いや同様の現れ、ストウルティティアを特徴づける振る舞いの現れ

弟子たちは話についていっており、理解していることを示さなければならず、そのために振る舞わなければならない。話に賛成の場合は微笑みや頭の軽い動きで表現し、当惑したり話についていけなかったりする場合は頭をゆっくりと揺すり、右手の人差し指をあげなくてはならない。

つまり…哲学のよき聞き手に要求されるのは、能動的で意味を持った一種の沈黙ということになる。よき聴取は、聴き手の一種の契約、あるいは意志の表明でなければならない。

● エピクテトスの話

- 話を聴きにきた香水をつけた若者に対し、エピクテトスは拒否の態度を取る。
- 若者（弁論術の生徒）「あなたは私に注意を払ってくれなかった」「なぜ進んで話してくれないのですか」
- エピクテトス「むしろ君自身の聴く能力を示したまえ。君自身の聴く能力を示さなければならない」
髪をなでつけた姿では、哲学を然るべき方法で聴くことなどできない。
→香水をつけた若者の例は、真実の言説に効果的な注意を払うことができていることを示している。
- 『アルキビアデス』のソクラテスとの比較：ソクラテスは誘惑に負けない。どれだけソクラテスを誘惑しようと、ソクラテスは心をとらわれない。ただし、二人とも少年の美しさに抵抗するが、ソクラテスの場合は生徒と師の愛情に満ちたつながりがある。一方のエピクテトスの場合は、生徒の飾りを拒否し、真理にしか関心を持っていない。エピクテトス（師）が刺激されるのは、真理に対する注意によってというただそれだけである。

● セネカ書簡第一〇八

哲学的教育はロゴスを通過しないではできず、それもレクシスやいくつかの語の選択を含んだロゴスを通過しないではできない→哲学的な言説は修辭的(レトリック)な言説と完全には対立しない。
真理を語るためにはいくつかの飾りが必要になる。

例：ウェルギリウス『農耕詩』「時は急ぎ去って再び帰らず」

- 文献学者、文法家の注釈…似た引用を見つけたり、語の結合を指摘したりする
- 哲学者の聴取…あるひとつの命題や肯定や断言から出発し、それについて深く考え、要素ごとにひとつひとつ変化させることにより、行為的な教え（生きること一般のための規則）へと少しずつ近づいていくもの

哲学的な注意とは、ペドイトゥングとしてのプラーグマに向かう注意のこと。ペドイトゥングは、観念そのものととも、観念のなかで教えになりうるもの、教えになるべきものを含んでいる（意義？）。

→聞き取った後にすぐに記憶化の活動を開始しなければならない。すでに持っている備え(パラスケウエー)と比べてどのくらい新しいことを聴いたり学んだりしたのかを調べ、どの段階まで、どの程度まで自分を完成させることができたかを見る

例：プルタルコスの床屋での出来事（きまって鏡の中にこっそり目をやり、自分が何に似ているかを見る）

→自分自身にすばやく目をやって、聴取を締めくくり、「自分のものにすること」ができたかを確認する。

哲学的聴取においては、二重に分岐した注意の作業が必要（プラーグマ：行為への視線＋自分自身への視線）